

目指す学校像	学校・家庭・地域が信頼の絆で結ばれた、ぬくもりのある学校
--------	------------------------------

重点目標	1 個別最適な学び、協働的な学び、探究的な学びの推進による学力向上 2 安心・安全な学校に向けた教育支援・相談体制と学校行事等の充実 3 学校・家庭・地域の組織的・継続的な連携・協働体制による地域とともにある学校づくり 4 タブレットを効果的に活用した授業改善に向けた教職員研修の充実
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価		学校運営協議会による評価				
年 度 目 標		年 度 評 価		実施日令和6年2月20日				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語、算数ともに平均を下回る児童の割合が多い。学習に対する関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国、市平均と比べ、国語、算数ともに高い。 ○読書マラソンの取組に積極的に取り組む児童が多く、読書冊数で年間目標を達成する児童が全校児童の38.5%と多い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査の結果分析から、平均を下回る児童の知識・技能の定着と、平均レベルの児童の思考・判断・表現力のさらなる向上が課題である。	・個別最適な学びの推進 ・協働的な学びと探究的な学びの推進	①児童一人ひとりが学習のめあてや学び方を明確にもち、学習の振り返りを通して、できた喜びを実感できる授業を展開する。 ②児童一人ひとりの学習状況を随時評価し、指導に生かす。(形成的評価) ③算数タイム等を活用し、計画的な学習相談を実施する。	①「学びの指標」の個別最適な学びに関する項目で肯定的評価が8割以上。 ②国語(漢字)・算数(知識・技能)の学期末テストの平均点が8割以上になったか。 ③各学級で全児童との学習相談を年に2回以上実施できたか。	①「学びの指標」の個別最適な学びに関する項目(1,3,10,14,20)の全校平均が4点満点中3.3で目標を達成した。 ②学期末テストの全校平均は、国語が87.9点、算数が84.2点で目標を達成した。 ③担任が学習相談を年2回以上実施できた児童の割合は、全校で99%以上となり、目標を達成した。	A	・タブレットを活用したドリル学習の推進等により、個別の学習は成果が見られる。一方、学びに向かう姿勢については、自ら課題をもち、解決方法を考えて取り組んでいるとまでは言えない。 ・次年度は「主体的な学び」に視点を当てて、改善に取り組みたい。	「主体的な学び」について、「自ら進んで」を育てることは難しい。総合的な学習の時間などで、「自ら問いを作る」「自ら探究する」など、目的意識を明確にした課題解決学習に取り組むことが一つの解決策になるのではないかと。17時間と限られた時間ではあるが、本校は地域とのつながりで密度の濃い学習ができています。 ・答えのない今日的な課題等について協働して考え続ける態度は十分とは言えない。次年度は様々な場面での協働的な学びを追究したい。
2	(現状) ○全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのが楽しい」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国、県平均を大きく上回った。 ○ペア学級による異年齢活動でのなかよし遊びや、児童会を中心としたあいさつ運動等を行っている。 (課題) ○いじめを認知した後、いじめの解消に時間がかかるケースが見られる。 ○いじめ防止、いじめ撲滅に関する取り組みの一層の充実が求められる。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談等に向けた校内体制の充実 ・児童が主体となって取り組む学校行事等の充実	①年度当初に、担任が蓄積された過去の記録や相談資料等を確認する。 ②情報端末を活用して児童アンケートや面談等の記録を蓄積する。必要に応じて保護者と連携し、個別の指導計画を作成する等、合理的配慮を行っていく。	①年度当初に、担任が蓄積された過去の記録や相談資料等を確認したか。 ②学校自己評価に係る教育相談に関連する項目の肯定的な回答の割合が児童アンケート95%以上、保護者アンケート90%以上、教員アンケート95%以上となったか。	①年度当初、児童理解研修等の機会に、全担任が蓄積された過去の記録や相談資料の確認をした。 ②学校自己評価に係る教育相談に関連する項目の肯定的な回答の割合は、児童アンケート96%、保護者アンケート92%、教員アンケート97%で目標を達成した。	A	・年6回の児童アンケート、年2回の保護者アンケート、通年のしびちゃんポスト、毎月のおひさまデー、年2回の保護者面談等を活用し、教育支援・相談を推進している。 ・次年度はスクールダッシュボードも活用し、支援の充実を図りたい。	スクールダッシュボードについて、寝不足や朝食抜きなど心配な面がアラートとして表示されるのは、家庭との連携を図る機会にもなる。しかし、従来の健康観察は友達の様子をお互いに知るといふ子どもたちの関係性を作る効果もあった。児童と先生とのやり取りだけにしないように、また、入力の正確性・信ぴょう性の問題もあるので、先生には子どもたちの表情やしぐさなど、これまで大切にしている対面での児童支援も引き続きお願いしたい。
3	(現状) ○50名を超える防犯ボランティアの方々が、毎日、児童の登下校の安全の見守り活動やあいさつ運動に積極的に協力してくださっている。 ○学習ボランティアやPTA役員を中心とした保護者に様々な教育活動や環境整備にご協力いただいている。 ○学校運営協議会準備委員会で目指すテーマを「地域や保護者とともに、地域のつながりを大切に、地元を愛する子どもを育てる」とし、PTAや地域のボランティアの方との連携・協働した活動を多く実施し、学校だより等で報告できた。 (課題) ○PTA役員以外の保護者にもコミュニティ・スクールの一員としての意識を高めていただくよう連携・協働の機会を創出していくことが課題である。	・ユネスコスクールとしての特色を生かした、地域との連携・協働による教育活動の展開 ・学校運営協議会とSSNが一体的に取り組む地域学校協働活動の推進	①各学年の生活科や総合的な学習の時間等の学習においてゲスト・ティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を行う。 ②本校HP内で教育活動や児童の姿を公開することにより、本校の取組や児童の成長に対する関心を高める。	①生活科や総合的な学習の時間等の学習においてゲスト・ティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を各学年1回以上。 ②学校自己評価に係るアンケートで、「児童の成長に対する関心が高まった。」と回答する割合が80%以上となったか。	①生活科や総合的な学習の時間等の学習においてゲスト・ティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を各学年2回以上実施した。 ②学校自己評価に係るアンケートで「児童の成長に対する関心が高まった」と回答する割合は69%で目標達成率86%だった。	A	・ユネスコスクールとして各学年の教育課程に位置付けている特色ある教育活動が定着してきている。 ・次年度はさらに教科横断的な視点を加え、児童が主体的に学ぶ中で、地域との連携・協働を生かしていきけるような指導を工夫したい。	PTA活動の負担軽減について、PTAのスリム化は、今後、PTAが持続可能な組織となるために仕方がない。しかし、PTAに参加するメリットとして楽しい、勉強になった、役に立った、学校情報を得られたなど、PTA活動のよさも伝えて、保護者自身のやりがいや有用感を得られるような組織づくり・活動づくりも意識して行っていただけるとよいのではないかと。
4	(現状) ○2年間の研修・実践により、オクリンク、ムーブノート、Teams等を活用した授業改善ができるようになった。 ○令和3年度、4年度ともに、年度末に行った一人一人の実践発表が充実しており、お互いに学び合うよさを実感した。 (課題) ○タブレットの活用方法は幅広く、より効果的な活用方法について研修・実践が必要である。	・エバンジェリストを中心としたメンター制度による、学び合い・高め合う教職員研修の実施	①エバンジェリストを中心としたメンター制度で学び合う時間を年に4回以上確保する。 ②全教員がタブレットを活用した公開授業を一人2回以上実施する。 ③全教員が実践発表を前期1回、後期1回実施する。 ④学び合いの活性化のため、メンター・メンティーのペアを前期、後期で変更する。	①エバンジェリストを中心としたメンター制度で学び合う時間を年に4回以上実施できたか。 ②全教員がタブレットを活用した公開授業を一人2回以上実施できたか。 ③全教員が実践発表を前期1回、後期1回実施できたか。 ④教職員アンケートで校内研修への肯定的評価100%(R4年度83%)。	①エバンジェリストを中心としたメンター制度で学び合う時間を年に4回実施した。 ②全教員がタブレットを活用した公開授業を一人2回以上実施できた。 ③全教員が実践発表を前期1回、後期1回実施できた。 ④教職員アンケートで校内研修への肯定的評価は78%となり、目標を概ね達成した。	B	・タブレットを効果的に活用した授業改善については全教職員で研修を深めることができた。 ・次年度はユネスコスクールとしての特色ある教育活動を生かし、「教科横断的な視点に立った探究的な学び」について全教職員で研修に取り組むたい。	タブレット等の活用により、子どもの視力が落ちているのは深刻な問題として頭の片隅においておく必要がある。宿題は紙ではなく、配信のみにしていてもよいのではないかと。一方で、タブレットでとめはねはらいまで求める漢字学習は不向きであるので、紙媒体とのベストミックスを探っていく必要がある。